

日向古代の前方後円墳

1.日向最古の前方後円墳

南九州で古い古墳というと、西都原の81号墳（B群）と櫛の櫛1号古墳と大隅の塚崎11号古墳があげられる。もう少し幅を広げると生目1号古墳と西都原72号古墳（A群）があげられる。

西都原81号墳と櫛1号墳は再度の調査が行われた。丘陵地に立地し前方部が短く箸墓古墳より古い纏向型前方後円墳の期待があつてのことだろうと思う。残念ながら布留1式や布留2式の土器が出土しAD300年前後を遡ることは無いように判断された。しかし、前記の古墳は全て、段丘の前端にあり、水田を見下ろし、水田からも見える位置にあり、かなり古いものと思われる。塚崎11号を除いては、前方部も短く最古の候補者であるだろう。

2. 前方後円墳の後円径と墳丘長の研究

まだ名のない前方後円墳を指定するとき、何が重要かということ、もともと円墳より発生しているため後円部の直径だろう。卑弥呼の墓も魏志倭人伝ではその直径が記されている。次なる重要寸法は前方部の長さであろうが、前方部のみを取り扱うか後円部と前方部を含めた墳丘長を取り扱うかは決めがたい。これらは先行研究があるので紹介したい。

東大の柴原聡一郎氏によれば、漢尺6尺を1歩とし5歩単位で墳丘長が決まっているとした。葺石の基底石が発掘され、築造時の計画長が確認された例では、大半が5歩飛びであることが想像される。つまり45歩とか80歩とかで墳丘長ができていくということである。ただし2.5歩程度の差異があるものもあり、乱暴な測量が行われた場合もあることが思われる。前方部の長さではなく、後円部も含めた墳丘長が主要寸法として、取り扱われたことになる。

沼澤豊氏によれば、後円部の直径は6歩単位という。

両者とも、小型の前方後円墳はその半分が最小単位として使われているとしている。小型の後円部径は3歩、小型の前方後円墳の墳丘長は2.5歩単位である。1歩は6尺、1尺は異論もあるが漢尺で0.2285mとし、1歩は1.37mとしておく。この2種の数列の表を資料として添付する。

この数列の数に後円部径や墳丘長を当てはめるのを、5・6歩企画値推定法としておこう。

3. 古墳時代の歴代天皇陵のデータ

崇神天皇から允恭天皇までの陵のデータを“古代天皇の前方後円墳の立体相似”という資料にまとめ添付した。下三列の上段が各古墳の測定データで二段目が前述の5歩6歩の数列から近いものをあてはめたものである。三段目は歩数で表したものである。三段目は、前方後円墳の設計企画が推定できるように考えたつもりである。後円部径を一とした場合の墳丘長を計算し相対値として記載した。箸墓古墳以前が纏向型前方後円墳で相対値は1.5である。箸墓は急に伸びて1.9となる。西殿塚古墳は1.67、崇神陵はさらに短く1.54、垂仁・景行陵は急に伸びて1.83、成務・仲哀・応神皇后陵は1.67となる。応神天皇からは徐々に長くなる。仲哀天皇は実在が疑われているのだが、応神天皇の父親程度に考えてもらいたい。いわゆる仁徳天皇陵と履中天皇陵は考古学的順序は逆であるということだが、徐々に長くなっている墳丘の相対長も同じ順序性を示しており、上石津ミサンザイ古墳で履中天皇陵といわれているものが仁徳天皇陵であるようだ。最大の大仙陵古墳で仁徳天皇陵といわれているものが履中天皇陵と思われる。そう考えることで、応神天皇皇后陵から始まるプロポジションとしての前方部の長く幅広く拡大していくことに一貫性を与えることができる。

ここで気を付けなければいけないのは、天皇陵を築造したのは次世代の天皇であることだ。景行天皇陵は成務天皇が、成務天皇陵は仲哀天皇が築造したことになる。短命の天皇の場合は次々世代天皇が引き継いで工事を行っただろう。

4. 崇神天皇および関係者の古墳のデータ

崇神・景行天皇の前方後円墳の立体相似の資料をご覧いただきたい。縦七列目に行燈山古墳の崇神天皇陵のデータを記載した。縦に四道将軍と早死にした垂仁天皇皇后のデータを記載した。四道将軍には親子で就任した者があり、親である大彦は、墓がはっきりしない。言い伝えのものは、考古学的にはかなり新しくデータとして採用していない。掲げたデータの相対墳丘長は、短くすべて 1.5 台である。崇神天皇陵と垂仁天皇皇后陵は垂仁天皇が築造したものといえるだろう。垂仁天皇がこの短い相対墳丘長比を考え、マスターモデルとし崇神天皇陵を築造し、更に同時期の主要関係者の前方後円墳を次々に築造したと思われる。

崇神天皇陵では 5・6 歩企画値推定法で、数値をあてはめても約数が少なく縮小して築造するのは困難なように思う。箸墓古墳の墳丘長もそうだ。この時代は、いろんな縮尺で縮小したものを各地に築造するという発想はあまりなく、その都度計算をしほどほどの縮尺で築造したのではなかろうか。

5. 景行天皇および関係者の古墳のデータ

5・6 歩企画値推定法で景行天皇陵の企画値を推定すると、墳丘長の相対値は 1.83 となる。景行天皇皇后の日岡陵も相対値 1.82 である。皇后の方が少し早く亡くなっているので、マスターモデルは景行天皇陵ではなく垂仁天皇陵ではないかと考えた。しかし景行天皇陵に近似しているため、殯や築造初期の計画変更等で景行天皇陵に合わせたものではないかと考えていたが、垂仁天皇陵を 5・6 歩企画値推定法で推定すると垂仁天皇陵も相対値は 1.83 となった。垂仁天皇陵を築造した景行天皇は、それをマスターモデルとして、皇后の陵も築造した。成務天皇は景行天皇陵を築造するとき、垂仁天皇陵をマスターモデルとして継承したことになる。景行天皇と成務天皇の時代は、相対値 1.83 という比較的長い前方部の墳丘が各地につくられたのだろう。

6. 九州南部の古代前方後円墳のデータ比較

日向に目を向けて相対墳丘長を比較すると、次のことが言えそうだ。既に崇神天皇陵に似ているといわれていた西都原 A 群の 72 号墳、及び、西都原 B 群の 81 号墳、櫛 1 号墳、生目 1 号墳が崇神天皇陵をマスターモデルとしているように見える。西海道に進出した四道将軍吉備津彦は、山陽地方だけでなく南九州にもやって来たことになる。比較的短期間で帰還しているので、軍事侵攻というよりは交渉主体で各地を回ったのではないかと思う。ヤマト王権の仲間になり、朝貢すれば返礼品や安全保障そして先進的な技術支援を行うというような話しを進めたのではないかと思う。各地の豪族はそれぞれ対立関係もあっただろう。そういう豪族は進んでヤマト王権に繋がっていっただろう。

崇神型の前方後円墳で最大は、生目 1 号で、次が西都原 72 号、櫛 1 号と西都原 81 号は同じ大きさである。当時大淀川流域に大きな豪族がおり生目 1 号墳を築造し、一ツ瀬・三財川流域に A 群に 72 号墳を築造した大きな豪族がいたのではないかと思う。さらに一ツ瀬川流域に B 群に 81 号墳を築造した豪族、新別府川流域に櫛 1 号墳を築造した豪族がいたことになる。崇神型の前方後円墳が大隅にはないようであるが、四道将軍吉備津彦の勢力は大隅

まで足を延ばさなかったということだろう。

四道将軍が日向にやって来たということは、なるほどと思う点がある。次に景行天皇がやってくるのだが、特段の理由もなく景行天皇が南九州に最初やって来たと考えていた。

十二年秋七月、熊襲がそむいて貢物を奉らなかつた。と日本書紀の熊襲征伐の書き出しにある。景行天皇九州遠征のきっかけは、朝貢していた熊襲が朝貢しなくなったことにある。熊襲は南九州で、それ以外は土蜘蛛である。この部分を見殺ししていた。景行天皇以前より南九州はヤマト王権に繋がっていたのである。

大隅の内之浦に高屋神社がある。高屋は景行天皇が仮の皇居（行宮）を作ったところである。西都の都於郡がそうであろう。大隅の高屋は、景行軍が駐屯したところだろう。宮崎の新別府川流域にも高屋神社があり、ここも同じく景行軍が駐屯したところだろう。

先ほど述べた、崇神型の前方後円墳を築造した豪族たちが、朝貢しなくなったことを問題視しての、景行天皇軍の出征だったのではないかと思う。日本書紀上は、景行天皇は熊襲を征伐して帰っていくのだが、そのあと景行天皇型の前方後円墳が築造されたかということでもないようである。景行天皇型と先代の垂仁天皇型は同じ前方部はかなり長いマスターモデルである。今後とも探してみたい。景行天皇と熊襲の戦いの伝承は、宮崎の綾町にある。

西都原のA群に13号墳がある。データは表に記載しておいた。グーグルマップや等高線図から推測するに墳丘長は81m後円部径は45mはあるようだ。削平を受けたのか風雨で変形したのか後円部の墳裾部がスムーズな円弧を描いていない。こちらの推測値で5・6歩企画値推定法を行った。マスターモデルは垂仁・景行陵となった。ロケーションも段丘先端部で古さを感じる。A群では垂仁期に72号墳が、景行もしくは成務期に13号墳が築造されたと考えられる。景行天皇の高屋宮からほど近い三財川の反対側の段丘先端部に小さな三財40号墳があり、古い時代の築造を思わせる。推定すると同じ景行・成務期の築造と思われる。13号の丁度半分の大きさである。13号墳に後続して作られたのだろうか。この直径16.5歩は6歩を小型墳ように3歩に刻んだものを更に1.5歩に刻んでおりそれが正しいかどうか今後の研究によるが、そうすることにより13号墳と2分の1の相似形となる。九州南部の前方後円墳の前方部の細さは、すでにこの時代に始まっており、土量を削減し工事期間の短縮を図ったのだろう。工事費の圧縮ともいえる。女狭穂塚までの間、普通のことのように前方部が細くなっている。

大隅に出征した景行天皇の跡どうなったかということ、大隅最古といわれる塚崎11号墳があるが、5・6歩企画値推定法で計算すると相対値は1.67となり成務天皇陵と同じになる。成務天皇陵の4分の1でできている。成務天皇陵は、成務天皇が亡くなってから築造されるので、景行天皇が畿内に戻ってかなりたってから塚崎11号は築造されたことになる。景行天皇が亡くなり成務天皇が亡くなってからの築造となる。景行天皇に繋がった豪族が長生きしたということだろうか。

生目1号に続く前方後円墳として生目3号墳があげられる。この生目3号も成務型である。崇神型の1号からすると、天皇1代25年とすると75年ほどたっていることになる。この間が、熊襲や景行天皇の時代となろう。

7. 九州南部の畿内型前方後円墳について

南九州の前方後円墳は、時代が新しくなるとともに前方部が狭くなっている。盛り土量を節約したためだろうか。西都原の女狭穂塚築造を期に畿内と同じ前方部の幅を回復したとなっている。女狭穂塚の相対値は、あの最大古墳大仙陵古墳と同じである。履中天皇陵といわ

れる上石津ミサンザイ古墳の方が古いということで、大仙陵古墳は仁徳天皇ではなく履中天皇陵の可能性が高い。墳丘長相対値もそれを示している。仁徳天皇が亡くなり、履中天皇が亡くなり反正天皇が築造途中に亡くなったところに女狭穂塚は築造されたのだろうか。4世紀半ばごろに南九州の前方後円墳は、畿内型に回帰しているようである。前方部が堂々と大きく横に張ったものになっている。

前方部を細長くしたのはなぜだろうか。土量節約のみで異形の前方後円墳を築造したのだろうか。

8. 終わりに

5・6歩企画値推定法を考え出して、いろいろな前方後円墳に適應してみた。思いのほかいいところを突いているように思う。と同時に古い古墳は単に数列を当てはめただけのように感じることもあった。

西都原81号墳と櫛1号墳の測定データは古いものと新しいものがある。墳丘長に関しては、いずれも大差なく、5歩単位の半分の単位の37.5歩がよく合う。後円部径に関しては、新dateより旧dateが小さく24歩となり、よく合う。墳丘長に関しては、新旧ともにあまり差がない。しかも櫛1号の後円は少しひしゃげているとのことで、基盤面の設定の仕方で後円部の主軸に対する左右幅が変化してしまったのではないかと考えている。これらの古墳は、四道将軍吉備津彦の古墳のちょうど半分の大きさとなる。

西都原1号墳は、段丘の先端部にありロケーションとしてはかなり古い部類に入るだろう。墳丘長は、西都原81号墳や櫛1号墳とほぼ同じである。ただ後円部径が小さく崇神型とも成務型とも判断できない。今後の調査でかなり古いものとして紹介されることもあるように思う。A群として72号墳とともに崇神型であるかもしれない。